ミオヤの光

淨土教義

序

先に曾て予が筑紫に巡教の際一の宗學生が予の客舍に來つて請うて云く生は淨土の流を汲むの徒　幼稚より習慣の感情には西方の彌陀を信じて往生を欣う、然れ共科學的智識の理性には淨土の存在を容るゝに地なし、己が感情と理性との衝突は自ら調和するの智なし願くは師よ淨土教の形而上の說を以て生が疑雲を開き玉へと、予は學生に諭すに宗祖の大原談義の大意を以てす其意に曰く、淨土と曰ひ穢土と云ひ現象には異なれ共之が統一の存在は同一の實體ならざるべからず聖道と曰ひ淨土と云ひ共に眞如實相を實體とし無爲泥洹を終局の目的とす之を離れて法なし、聖道門に明す處の凡聖齊圓の眞如か他力の實體なり、絕對に二ある筈なし、然るに其實體の上に衆生は己が業感に由て感するは穢土にて、同じ實體の上にはあれど如來四智の作用より現はれたるは淨土なり、如來は絕對にて方域分齊はない然れ共業識に昏みてわからぬ人の爲には遠からぬ極樂をも十萬億土に構へざるを得ぬ自己の實體が同じく彌陀の本體の故に

若し佛慧に相應すれば此處に彌陀は現前すべし、自力佗力と云は但眞如を顯はすにつきてのこと自力と云も實は我を離れた無我の眞如の顯はれを聖道の悟と云ので他力と云も自力の我を離れたる彌陀の眞如の顯はるゝ處にあり、善巧善便にて眞如より出たる法藏の行因に彌陀果號の光明を現はし斯光明に照さるれば　如　來の眞如が我物となる、往生と云ふも實は無生を證得したることを云ふので彌陀の眞を獲れば現世に證得往生か得らるゝ韋提夫人が其證據なり、聖道と淨土は其根底と終局とは一致すべきので全く別と謂ふは誤謬の甚だしきなりと是が談義の大意なり、予は宗祖の談義を經とし自己の研究を緯とし而して如來實體化用等の形而上理論をのべて學生某甲の懇請に酬へんとし、焉に不文を顧みず是の淨土教義を草したる所以なり。

淨土教義

如來の實體及び化用

宗祖の曰く、夫れ諸佛の法は眞如佛性を以て性體と爲無相泥洹を以て所期とす此理を離れて外に全く別法なし淨土門に謂ゆる他力本願の實體とは是れ佛の密意にして佛智の所照なり、凡そ聖淨二門は共に眞如實相を以て其體とす故に聖道門の明す所の無塵法界凡聖齊圓の理恒沙功德寂用湛然の性が即ち是れ他力の實體なり、次に佗力本願の化用とは謂く密意の上の敎門なり亦是四智の所成なり極樂遠からずして十萬億の西に構へ彌陀己心に在て一坐花臺の形を現す　不思議　智不可稱智とは此善巧方便を指すなり、誠に以みれば眞如界の內には生佛の假名を絕し平等性の中には自佗の差別なし眞如は自に非ず佗に非ず自佗の性を包む故に鎭へに自佗に薰習して平等性の海に會入す

自力佗力共是れ眞如の力なり

淨土の頓入は眞如法性を法藏の行因に究めしめ佛智の所照に讓らしめ是を佗力の實體

弘願の密意とす、如上の談義は宗祖の如來實體と化用との形而上說とも謂べきものか又宗祖の意淨土敎も聖道門と同しく實體には異無れ共化用の方便に於て淨土の方か最も善巧なりとす、予は宗祖の談義を演繹して以て經とし自己の研究と宗敎心理の經驗の歸納を以て緯とし淨土敎義を說明せんとす斯研究に就ては亦宗祖の至極大乘の意は體の外に名なし名の　に體なしとの格言は又如來甚深の秘藏を開くの鍵を授かりし感あり

如來には十二光の異名あり、此名には如來の眞理を悉く含藏せるものにして斯の靈名こそ宇宙の秘密藏を開の寶鑰なりと信じ專心研究と及び三昧修行の結果は實に名體不離の眞理を悟り大に如來甚深の秘要を得たる哉に感ず依て大悲の加被を仰ぎ十二節の頌を造りて以て宗敎の綱要を述べ更に釋義を作りて文句を解す

無量光　如來體大處として實在せざるなし

頌に　歸命無量光壽尊　一身乃至十佛身　獨尊統攝歸趣の義に　偏依の依たる圓實性　物心無礙超時空　萬物內存心靈態　內に無盡の德を具し、自然心靈二界あり、生產門には法身の、一切知能が天則の、因緣因果の律を以て、世界と衆生を發展し、攝取門には性起なる、法般解脫の德をもて、衆生を選擇攝取して、菩提涅槃に歸趣せしむ

頌の中　初に名を標し、二、一佛種々の身あること、三　如來に三義ありて萬有の宗致たること、四　三性分別して如來と萬有との性を別つ、五　實體の本質、六に內容無盡の性德、七　に自然と心靈の二界、八　に生產門、九　攝取門

初に名を標す　歸命無量光壽尊宇宙に絕對的獨一の神尊を認め之に歸命信賴して最終の希望を求むるか宗敎とすれば獨一の神尊を何なる名を以て稱すべきそ、宗敎の客體を通して神と呼ぶ、神を標するに或は天の父と云ひ亦は天帝と曰ひ、エホバ　ブラハマ等の種々の名を以てす、學語には眞如實體　第一義諦等の名詞を以てす、法身　ヒルシヤナ　如來等は皆な宗敎的神的表號なり、密敎には金胎不二の大日を以て唯一の神とす、斯敎に於ては阿彌陀如來を絕對獨一の神に名つく、阿彌陀とは絕對無限の靈體にして永恒存在の故に無量壽と曰ひ又普く法界を照し一切を攝取し靈化し玉ふ故に

無量光と名つく

一佛に無量身あり　絕對不二の如來は身土依正色心相融し萬有內存遍在法界の大我なれ共、衆生の爲に二法身三身乃至十佛身等を示現す二法身とは法性法身と方便方身となり、本有常住の彌陀如來か法藏因位十劫正覺の方便身を出して衆生を法性本覺の源に還らしむ、亦三身を以て衆生を生攝す、謂く法身は天則秩序の大原則として世界及び衆生を成生し衆生は法身の分子なれば伏能か發達の上には解脫を求む爲に於て報身なる偏照法界の身を現し衆生を攝して淨界に還らしむ、迷の衆生に其眞詮を敎へんが爲に應身を現す是人佛釋尊なり、又密敎に謂ふ處の四種法身あり自性身受用身變化身等流身　是れ大日と四佛十六菩薩金剛部等にして皆獨一法身の現身なりとす、又花嚴には融三世間の十佛身を立て佛の無盡の德を示す、宗々に佛身を談すること各別なれ其實は一佛の異名に過ぎず、故に斯敎にては十方三世の諸佛及び諸天等は本に歸すれば彌陀一佛なり、故に楞伽經には十方佛刹中の衆生菩薩等所有の法報應身及變化身皆無量壽極樂界中より出づと、宗祖曰く淨土の中には極樂を最とし諸佛の中には彌陀を本とす彼の佛は是淨佛國土の主諸佛慈悲の體なりと

如來に三義ありて萬有の宗致とす

頌に　獨尊統攝歸趣の義に。宗敎は絕對的獨一の存在を信じ之に信賴して救度を求む、宗敎に一神敎汎神敎超在一神的汎神敎あり、一神敎は天に在はす神のみ神性にして衆生には神性なしとの敎、汎神敎は一切衆生皆自己に神性を具す之を開發すれば自己卽ち神なり其外に獨一の神を認めずと敎ゆ、超在一神的汎神敎は絕對唯一の神の超在を信じ神を離れたる一切なきが故に衆生は神の子にして神性を有す然れ共獨一の力に依らざれば神性顯はれ難し故に獨一の尊神は一切萬有の獨尊なりとす、唯一の如來は絕對の大威力を以て萬有に儼臨し玉へるも天然の人は直接に其威神光明を信ずべきを自覺せず第二義の世界を以て依屬すべきものと想ふ、旣に靈性開けし人の宗敎心は身は世界に在て心は唯一の如來を活ける本尊として一切の時處に相離れざるの觀あり

統攝　如來より發する眞理は一切萬法を統一攝理して活動せしむ

三歸の中の法とは是なり諸佛も如實の理法に依て正覺を成す、法は謂ゆるロゴスにて如來が萬物に及ぼす力又一切衆生を攝して靈界に歸せしむ理法なり如來の絶對的理法は自然界と心靈界とを統一し玉へても自然界の方には天則秩序の理法とし勢力とし天に在ては日月の運行より地に在ては動植物の生理に至る迄も及ばざる所なし又一面には心靈界が法性の理とし大菩提の勢力とし衆生を解脱し靈化して如來の下に攝取する法則として存す攝せらるゝ人の方より云は天然の人には如來の理法を天命として之に順ふ靈性の人には如來の神聖なる統治の下に法性の理に隨順して如法の道德的行爲の則とす、如來の聖意に隨ふと法性に從ふとは同一なり、天然の人は間接に統攝せられ靈性の人は如來の直轄の下に統治せられて終局目的と連絡するに至る、統攝の理性は衆生の伏能を能く保護して向上せしめ進化の終局目的に向て行く行路を攝理するの勢力なり、統攝と歸趣との連絡は甲は衆生を能く調ひ能く攝めて有終の美あらしむるように此方より送る如く歸趣の理性は彼方より來迎するに比ぶべし

歸趣　經に一切衆生本法身より生して還た法身に歸らざるなし

如來の有たる宇宙には天則に隨つて衆生を向上せしめ終局には如來の本居なる無爲泥洹に歸着せしむる勢力存在せりと法身より生し終局に還た法身に歸するの順序は先づ唯一の獨尊は絶對より一展しては世界が現し世界の上に三展せられて衆生と爲り衆生の發源は極小の生物より漸次に進化して高等と成り頓て人類と成り人類か精神の進化は理性と現はれ世界の事理を認識するに至り理性の益々發達するは自然界に秘る神の密藏も開くべき鍵とはなれり尚ほも進みて大心殿に伏せる靈性は內より開けんとして其の機會を迎ひは如來は終局目的の聖意より報應の二身を現して衆生界に對する心靈界の太陽として攝取の光明遍く十方の法界を照し歸趣の道を明らかにし玉ふ終局には一切諸佛と等しく正覺を成し涅槃の本居に歸らしむ即ち是如來本願の力なり故に般舟三昧經に三世諸佛皆念彌陀三昧に依て正覺を成すと

三性分別して如來と萬有との性異ることを明す

頌に　偏依の依たる圓實性。三性とは一　如來性　二　世界性　三　衆生性　唯識論の圓成實性因緣起性分別起性の三性に配せは、如來性は圓成實性に配す如來性は絶對

無限の故に圓と云本然の自性因緣に依て成たるに非す本成の故に成と爲永恒不變眞理の靈體の故に實と曰ふ是れ如來性は絶對無規定不生不滅永恒自存萬德圓滿の故に圓成實性と云ふ、第二世界性現に吾人が天地と仰く自然界を世界性と曰ふ即ち因緣起性なり世界とは空間に四方上下の方角を爲し時間には過現未の三世を形成し因緣相依て空間に相關し因果の關係は時間に相續し、世界は本絶對なる如來性の常恒遍動の相對的現象の方面なれは萬物生滅變化極りなく無常遷流止むことなし、世界の上に生を受たる衆生は常恒遍動の世界を以て絶對的に依屬に勝るものと想ひ而して唯幸福のみを希求す然れ共世界は自然の法として空苦無常無我を以て衆生に律す爲に滿足を與へす、若し世界は如來より發展せられたる一面にしてより已上の高等なる靈界に進むべき修行の土なりと觀する時には大に意義の存在するを發見すべし

第三　衆生性　世界を依止とし因緣に規定せられて成生せる機能的團體を衆生と云ふ、衆生は伏能の靈性より云はゝ如來の子にて因緣に規定せられたる生理的機能の方より云はば世界の子なり、衆生は劣等なる生物より人類に至る迄無數の階級あり衆生本如來性を根本としたる小分子としては個々皆小法身なり又小造化なりそはいかに微少の生物にも生殖作用あるを以て知るべし、衆生は如來性より稟たる靈性を伏藏したる故に益向上せんとの性能存せり、自然に約束せらる方には其が自由を許さず、動物と及び天然の人とは自然の奴隷たるを免れず、若し世界依屬の心を脱して、直ちに絶對に依屬の安心を得る時は精神的に解脱を得大我の中に自由の人と成るべし是宗教が世界依屬の心を解脱して絶對に安立すべきの眞理なるを敎ゆる所以なり、人類は天性としては凡てと同じく生理的機動の動物なり理性ありて佗の動物を超て萬物の長とし又世界の事物を知を得若し靈性開く時は絶對の如來性と合し永遠の生命を得常住の平和は得らるべし宗敎の歸趣こゝに存せり三性の中如來は絶對無規定永恒自存の大靈態世界性は相待に規定せられたる時間空間的存在衆生性は世界に依止する機能的團體なり

如來の實體

頌に　物心無礙超時空　萬物內存心靈態。如來の實體とは大原談義に謂ゆる佗力

の實體なり、淨土穢土と衆生と佛と現象には異るも之を統一する存在なる實體は同一ならざるべからず、實體論には古來物心二元論又唯心論唯物論唯理論あり、唯物論者は謂く宇宙を構造する本質は物質の原子が不滅にして其勢力は永遠に存在し自然律によりて萬物を造化すと又一方には宇宙を包含する處の普徧概念は變化極り無き中に不變の法則存在し之に依て萬物を成生すと、精神現象と物質現象との統一的存在を眞如と云ふ眞如とは物心不二の理體なれ共活動の主體なるが故に心眞如とし精神的に見做なり、宇宙の實在は吾人の直覺と同一本質にして不斷の活動も亦吾人の精神に比すべし、又實在が吾人の直覺と質か同からざればならぬことは、自から直覺に依て證明せらるべし、佛敎にては宇宙の本質と吾人の精神と同一なることは禪定に心を用ゆる人の證する處なり、物心統一存在を物質の方に重きを置て觀る者を唯物論者にて、精神的に認めて居る者を唯心論者と爲す、心眞如即ち實體の本質は物心無礙時間空間に非して而も時間空間に遍在し絶對永恒萬物内存の大心靈態なりとす、萬物内存の故に内に非ず外に非ず故に絶對なり、物心を統ふ大靈態とす、之を宗敎語に云はば本有法身無量光壽尊と名つく、即ち宇宙の本質絶對大心靈なりとして先づ實體を明し已ぬ

實體内容の性具

頌に　内に無盡の德を具し。實體の本質は絶對大心靈態なりとは已に論じぬ、大靈眞如の實相は本來一如の無相なり色聲等の物象もなく感覺等の心象もなく謂ゆる上天の載は音も無く臭もなく實に宇宙の本體は一如の靈態にして一切の相性を離れたり若し積極に云はば大心靈態のみ、然れ共無相の相は相として相ならざるはなし、無相より一切の相を現し、無定性より一切の性を生ず、一如の大靈には實に重々無盡不可思議の性德を具足し、其活動より宇宙萬物依止色心は現出せられしなり　宇宙大靈の一小分子なる人の腦髓は本來無想無念の體なれども智力印象記憶想像等實に雜多の事理が精神に含藏してそが緣に隨て發現す、博覽强記の腦萬卷の書及び生涯の印象も悉く内に納れて餘りあるに非ずや、又天才の頭腦より詩歌小説等極りなく操り出す然も其文々句々人をして或は泣かしめ又は笑はしむ一個の腦裡尙斯の如し況や十方三世一切を包含して遺すこと無き宇宙一大腦髓に於てをや實に無盡々々不可思議なる大靈的

腦髓の内容は豐富無盡にして一切の依正色心を無量無邊の世界及び衆生の機關を以て現出せしむ

宇宙内容は斯の如く無盡の性德を具備するが故に如來藏性と名つく、又密家に胎藏界の大日と云も此内容無盡の性德を具へて緣に隨て產出するの謂なり。之を内容無盡の性德を具すと云其内面より何にして萬物を生產する哉は生產門に說かん

自然界と心靈界

宇宙は本絶對なれとも吾人が感覺の對象なると又直觀の對象なると二方面あり甲を自然界と云ひ乙を心靈界と云ふ、自然界には天に日月星宿運行し地に一切の生物生存す自然の律によりて四時行はれ萬物成る、自然の法は因緣に依て生滅し因果的に相續す一切生物　の生存競爭は古今に通じて優勝劣敗の則を變せず、何の地にも適者生存の規は行はる生者必滅會者定離は今も昔も異ならず、老病死苦は尊卑を擇ばず　無常苦空は賢愚を論せず、然るに天然素朴の輩は唯世界を快樂の舞臺と想ひ朝に開きし榮華の夕邊に散ゆくを悟らず、唯肉の快樂と利己主義を以て目的と爲、云何せん欲樂は貪ぼれば貪ぼるに隨て不滿を感じ不足が增す、自然は彼らが欲を充しめず是れ寔に天然の人が依屬せし世界に滿足を得ぬ所以なり故に彼らが終局哭泣と哀悼のみ

理性の發達したる人の世界觀及び人生觀は又趣を殊にす世界は物質的器械的にして物質不滅勢力永續にて自然律に生成せらる我なれば終に自然の原子に歸る、自然の力は偉大にして迚も人力の如何とも爲す能はざる處ろ故に唯人事を竭して天命を待つてふ觀念なり、又宗敎に入ても超然主義の世界觀は是自然界を濁惡不善の最も厭ふべき處五濁の衆生は八苦充滿して忌むべき處、此穢惡充滿の世界を遠離せざれば永遠の安心は得難しとす、又進んで靈性開發を期せん人の爲には、現世界は本如來より發展せられたる一面にて自己の伏能を開きて終局目的に進むべき楷梯の土と觀し、現世界は自己を鍛錬すべき道場にして自然と人爲の迫害は還て精錬の器械にて一切の誘惑と妨害とは尅己忍耐の試檢具なり、經に此土一日の修練は淨土に於て百歲するよりは勝れたりと由之見れば斯土はより以上の高等なる目的に進むべき道なりと云はん

若し人勇猛に精進し、如來の大光明に接し靈性覺醒し來て觀すれば靈性の旭光普く十

方に照耀し、身は自然に在て神は常樂の涅槃なる靈界に逍遙すべし、是を有餘涅槃とす

心靈界

吾人が肉眼に對する世界にあらずして心眼にて觀ずべき方面なり、自然界と心靈界と二界を對比せば、前者を穢土と曰ひ後者を淨土と云ふ、又生死界と涅槃界、又娑婆と寂光土、染法界と淨法界等の種々の名を以て區別せらる、心靈界には密嚴淨土、蓮花藏界等の麗はしき詞を以て名つけらる、高等なる宗教の目的は心靈界に超入して永劫の平和と常住の生命を得るを求むるにあり、基督教に天國と云ひ佛教に淸淨佛土と云ひ其實は同一なり、然れ共夫に對する觀念には淺深相同じからず、然しながら其觀念の程度は實は其人にあるのみ、猶太教にては天國は全く高遠なる蒼天に在ると教へ、基督教には天國とは神の在す所ろ神在さざる處なきが故に天國は遍在す、但し人が罪の爲に自から靈福を享受すること能はざるのみと、佛教にても極樂は全く西方十萬億の彼處に在るとの說は實は佛陀出世前印度古代よりの傳說にして、佛陀は極樂は涅槃界なれば實には方域分齊は離れたる物なり、然れども心眼開かざれば經驗するに由なし故に或る機類に對しては、從來の傳說を捨てず須摩提を西方に在りと教え或類に對して去此不遠と說きて自己の觀したるまゝを敎ゆ、天然素朴の人か極樂は世界を十萬億超たる彼處に最幸福の世界ありと想ふ如きの觀念は自然科學の智識ある人の信すること能はざる處なり、されど大乘佛教の淨土の說は實には絕對なる心靈界中に主觀的に觀すべきなり、釋迦佛陀が伽耶の道場に於て朗然として無明の夢醒め正覺の日光登り來りて顯現したるか即ち大涅槃の靈界なり、大涅槃界が卽ち須摩提なり、世の人淨土の存在を疑ふ者、多くは淨土を自然界に認むること能はざるが故なり、然れども淨土は自然界の現世界の如くに存在する物に非す、自然の世界は實には凡夫迷の夢中に見ゆる處、淨土は心靈の覺たる人の見る處、若し無明の眠覺め來らば忽ちに現前すべし、プラトー曰はずや、凡夫の畫と爲る處は聖人の夜にて、聖人の畫となる處は凡夫の夜なりと、釋迦曰く我三界の如くに三界を見ず、如實に三界の相を知見すと、釋迦は五眼具さに備はりて若し肉眼を用ひは吾人と同じく娑婆を見又佛眼を以ては淸淨の佛土を觀玉ふ、法花經に衆生劫盡て大火に燒かるゝ時も、我

此土は安穩にして天人常に充滿し種々の寶を以て莊嚴す等、大火に燒か被る方は無常遷流の自然界にて常住安穩なるは靈界には佛眼の所見なり

心靈界としての宇宙は實に不可思議なる、華嚴三昧の窓より見は重々無盡の蓮花藏世界に不可說の莊嚴なる依報の淨土に無量の相好光明を以て法身の大菩薩の爲に說法し玉ふあり、又常寂光土に淸淨法身の如來常に大衆の爲に說法し玉ふ等の方所は宇宙の絕對心靈界を離れて何の處にか求めん、佛教に諸の三味あり、三味の寶鑰に心靈界を開く時は、如來は現前し淸淨國土は見ることを得ん、若し靈界開發し心機一轉人格革新する時は身は昨日に異ならざるも心は淨土に安住することを得べし、之を有餘涅槃と爲す、宗教の最も一大事と爲る關振は精神更生にあり、佛陀が其徒及び有緣を導くの目的は人格を革新するにあり未だ佛陀に親化を受ざる間は盲目的生活たりし輩も已に機緣熟して開化せらる時は初に法眼開きて眞理を見、終には全く靈性開發し惡質解脫したるを無學位とす、禪家に大死一番、基督教に復活又は更生と曰ひ、若し人格を交代せしむる機關備はらざる宗教は幼稚なる教として我淨教に最目的と爲る處の往生淨土と云も此の人格革新の事實に外ならず、宗祖の談義に往生と言は諸教諸宗の悟道の時の名なり、又曰く韋提夫人が第七觀の時に大悟無生を得和尙之を釋して證得往生と云へり、此最上利根の人他力本願を信知して現世に往生を證得せしなり、往生とは卽ち無生なり此義重ねて思擇すべしと

生攝論

生攝とは從來の緣起論又心生滅と云ふことにて經に一切の法は法身より生じて法身に還らざるは無し起信論に如來藏性と阿梨耶とを合したる處に一切の法を生し一切の法を攝すとその順序を說明するを此二門とす、初に生產門、次に攝取門、生產門

頌に曰く　生產門には法身の　一切智能が天則の　因緣因果の律をもて　世界と衆生を生成す。生產とは從來の緣起の中の流轉門なり

萬物緣起の根底は已に明したる絕對大心靈なり、萬有生起の原因を或は阿賴耶緣起又眞如緣起又如來藏性緣起又は六大緣起等あり、生起の因緣は眞如自性を守らず隨緣して衆生となる、又は法性本淨無明に由て生死に墮す、忽然念起が無明の源、是れ生死

の本源なりと、又は本覺の佛性が眠て衆生と爲る等從來の生起の原因は本來の光明失つて闇黑となりし如くに見做されしやに想ふ、而して衆生心を根本として世界及び宇宙に及ぼす如し、太古の神話に人間在りて後に世界は造られし地が成て後に太陽は人の祖先に產出されしとの話の如し、人爲則ありて後に天則定まりし如くに話の順序が出來て有りし、昔は地は廣大にして太陽は陽精の珠の如くに想ひたりと見へる、其如くに衆生心が本にして衆生自ら造て生死の苦を受くと、故になり、故に衆生心が本として宇宙を說明して居るなり衆生を本として一念忽起の無明なり、衆生自分より一念忽起の無明に迷ひ出したる生起說は無明念起の理が明らかに解すること能はず、今は親ありて後子あり、天則ありて人爲則立つ、緣起の順序が大に異なれり、吾人衆生の一大原因は、絕對の大靈法身より一展したる現衆の世界、世界ありて後に三展せられたる衆生なり、故に緣起の大原因は、一大心靈形式より云は、法身即ち萬法の大原則として秩序を以て萬物を造化す、內容に名つけば如來藏性即ち自己に無邊の性德を具備して、自己內の世界萬有なれば、無形一如の大靈藏より順序を以て世界及び衆生を生成す、夫に就ては、萬有の父なる法身てふ大心靈には、智力と意志との二屬性無かるべからず、智力と意志か即ち一切知と一切能となり、大靈の遍動力は萬物に內存の能力として、又萬物を動かすに秩序あり、條理あるは一切內存の理性即ち一切知と、絕對心の一切智と能とは普徧にして、云何なる時にも處にも存せざるなし、永劫靈活の大心か、遍動中に絕對より展せられし方面は、相待的に規定せられたる世界なり、吾人が經驗しつゝある現世界は、絕對の一方面なり、絕對と世界とは一體の異方面なり、大心靈が秩序的に遍動せし萬物を發展する作用と、外面なる世界の方より見れば因緣に相關し因果律に生成するなり、故に內面より秩序的發展を外部には因果を顯はるゝなり、故に秩序的發展と、因緣因果とは、一體の兩面なり、法身體中の世界には相待に規定し合ふ勢力あり、因に相應すべき緣あれは和合して果あり、果又因種となり又果を生し、因の緣との連絡は空間には天體無數の星辰となり、其萬物相互に因緣に關係し、相親しみ、相資け、相競ひ、相刺して發達し、增長し、資緣が種因に適せざれば生存に勝へす、絕對が常恒の活動また建設的事業は因緣因果として世界には成

住壞空新陳代謝は廣大なる天體に常に行はる、世界の太陽又地球も一切の星辰も本一大法身の分身たる世界性の故に親と同じく造化の事業暫らくも止むこと無し、世界即ち太陽地球等は三展したる衆生を生す

衆生に對しては親なり、故に衆生てふ子らを養ふ設備に常に怠らざる如し法身の智と能とは世界には陰陽の二氣と現じ、又因と緣との兩力と成り、太陽よりは地球を產出し、太陽は常に地球に能力を與へ、此兩者の關係は陰陽二氣となり、父と母となりて衆生てふ子を產出す、衆生には大心靈より稟たる性と又世界より賦せられたる氣質との、兩性を具有す、衆生は是兩性を具する故に、解脫の要とまた能とあり、若し衆生が本來靈性のみにて自から成佛すべきものならんか、宗敎の要なきなり、靈性は自から開け難く、煩惱は自から解脫し難し、靈性も開顯せざれば、何の功德か有らん、煩惱解脫せざれば空く沈淪す、此に於て宗敎の要と能とある所以なり衆生は大法身の分子たると共に世界の所產なり、法身の父なくは靈性うくる由なし、天地の親なくば此身成り難し

法身より緣起せる因緣を更に說明せば

頗に云く　如來絕對圓實性、屬性一切知能より、展して世界相待性と成り、十方三世に相關し、因緣性より三展し、個々分別の衆生性、極小各自の伏能は、互に競ふて進行し、生物進みて人と成り、理靈の二性を自發せり、如來は自性絕對の、心靈界に攝せんと、報應二身を現しては、皈趣の理性を顯はせり、遠求二心は神人の、因緣力の理法にて、光明攝化の終局は、本始不二とは成りぬべし

是の三性緣起の次第を論せん、先づ一大法身は圓成實性にて內面の一切智と一切能との常恒の働らきが、外部より見れば、世界の因緣因果律に形成せらるゝ萬物と現はるゝ、宇宙全體が大法身大造化の故に世界も又法身造物主なり、又第三展の衆生も又小造化小法身と云ふことをうべし、就ては大法身より展轉し小法身なる衆生に至るまで各全力を靈して活動せざるものなし、絕對に對せは大海の小浮漚にも價なき、太陽系にてもまた下つて生物界にても何れも進化の爲に努力しつゝある光景を見よ、先づ太陽が星雲の狀態より、無數の時間を以て努力の結果は己に成功を遂げ、大威力あるこ

と、絶對の實在の威德の分を現はし、而も天體の親として地球と云子を分娩し、親の恩寵は子の爲に、力を注ぎ、地球もまた初め瓦斯態より漸次に發達の結果は、又生物てふ無數の子を產み、地球も未だ高等生物を養ふ資力備はらざる間は、極小の生物を發生したり、極小のアミンバにも內的生命に、法身よりの系統をうけたる狀態が具有するが故に、外緣の與ゆる限りは發達し、內に向上せんと欲する活氣あり、外に之を助成する機關なる植物なども增進し、生物は次第に進化し、無數の階級を經て、竟に人類と現化せり、人類も原始の不完全なる狀態より、漸次に完全に進み、動物進化の目的は、若し宗敎の立場より云はゝ、生理機能即ち肉體は手段にして、精神の方に於て永遠不滅の目的を得るにあり、即ち精神中に最高等なる靈性を發揮し、如來の聖意に從ひ、本覺の涅槃に歸着するにあり、生物に植物生活と、動物生活と、精神生活との三階あり、何れも生物には營養と生殖との兩職分あり、營養を以て自家を保存し、生殖を以て種族を保存す、人類も又生物なれば二つの職分を營むべきは勿論なるも、人類が萬物の靈長と誇る處は精神生活にあり、精神が他の動物に對して、區別する時は、先づ人の精神の宮室とも云ふべき、頭腦を三階に分ちて、他の動物と異なることを示さん、尤も頭腦三階の說は骨相學者の便宜上用ゆることにせしなり、先づ眼より下を天性とし、五官の作用眼に視、耳に聽き、鼻に嗅ぎ、舌に味ふ等の働きは、生理上缺くべからざる部にして、人類も他の動物と共通にして異る事無し、寧ろ他の動物が人類よりも遙かに勝れたるあり、眼より額の中位に至る部を理性と曰ふ、理性は獨り人類のみに備はつて居る心の働らきにて事理を判斷し、觀察し、認識し、すべて世界萬事の事柄を理解し、常識を以て我と人との間を有るべきように計つて行くのは理性が有る故なり、世が文明に進ませるも、此理性の力なり、次に上階の額より己上頂上に至るを靈性と爲す、精神中最高等の位なり、人は靈性開けて初めて絶對なる如來の靈力を交感し如來の啓示を蒙むり、美天國に逍遙し、法喜禪脫の妙味を嘗めて、靈き生活に入り、平常に如來と共に在りて現在を通して永遠の極樂に入るを得、靈性は如來の大靈と一體なり、故に靈性開く時は大靈界の秘密藏に藏めらるゝ處の、如來の珍寶を精神的に受用する事を得、然らば如何にして靈性を開くべき哉は次の攝取門に

詳說せん

吾人は宇宙には終局目的あるとする宗敎心の見地よりして、己が現に如來の目的に稱ふ身に成りし事を悅ばざるを得ぬ所以はいかに、今己が此身を受けしに就ての歷史の淵源に遡りて考へ見よ、生物が初めて地上に發生したる單細胞の微虫より漸々に進化したる階級の中に、何れも皆自已保存の爲め又發達の爲には全力を竭して競爭し努力し進化し劣等より高等に進み人類と化し數萬代に亘りて不撓不屈に努力の結果の系統より受たる吾身にして、彼らが階級と爲り犧牲と爲りしも、今我此身に於て靈性的の生命となり本の御親の許に歸り得る目的を達する爲なりと思へば、實に吾が爲に犧牲と成りし代々に對して感謝せざるを得ず、又自已も飽迄努力して目的を達せざるべからずと想ふ、尙進みて太陽及び地球等の天地萬物の備設の廣大なる云何そ凭く大なる設備に依らざれば、此身の生命は保ち難し、大なる父は是の如きの備ひを以て我が爲に聖意を注ぎ玉ふかと存すれば、此身を犧けて聖意の目的に隨かはざるを得ず、殊に目的を示さんが爲に、諸佛賢聖を使はして、子らが爲に德音を宣傳させ玉ふに於てをや、若是の身にして、終局目的なる攝取の恩寵を仰がざれば如何にして泥梨を免かることを得ん

攝　取　門

頌に云く　攝取門には性起なる　法般解脫の德をもて　衆生を撰擇攝取して　菩提涅槃に歸趣せしむ

攝取門とは從來の還滅門にて、還滅とは衆生が煩惱妄業に依て生死に流轉したりしに佛法に遇ひ解脫の道を得て生死の源なる、煩惱を滅し生死の源が滅する故に、本來の涅槃の眞天が顯現すとの義なり、今は宗敎的に大なる親の力を仰ぎ、絶對の方より攝取の光明を與へ賜ふ、故に攝取せらるとの義を以て還滅と云はずして攝取と云ふ、攝取は親鸞師の謂ゆる他力回向の義なり、又法身に還るの法なり、衆生が生產するの方向は初め絶對より相待に向ひ、極大より展轉し即ち太陽となり地球となり地球の極小の生物に向下し極小より又向大し多々なる階級を經て人類と進みたり、衆生性には三種の親を有す即ち此人間の親、天地てふ親、絶對の親、天地陰陽の子たる元氣も、人

間の父母に依らざれば人の身は成り難し、天地に受けたる元氣が人の親に依て生成せられ、或程度に到れば人の親を離れて、天地なる親の子たる分を竭す、若し終身人の親に依賴して獨立する能はざらんか親の歎きと厄介と幾干ぞや、人は成年に至らば獨立自治天地の子としてこそ人てふ親も實に滿足なり、尙更に一歩を進めて心靈生活の人類として見んか、吾人は絶對大靈なる如來の子なり、然れ共此身體に就ては天地てふ親に依らざれば成り難し、即ち天地なる親が衆生てふ子を養ふに就ての萬物の設備の容易ならざる事は、とても幼稚なる吾人の思想の及ばざる所なり、しかして衆生は先に述し如く、親の手を離れて世界てふ親に依て獨立すべきなりと、而すれば身體的生活に就ては成功したる者と言ふべけれ、進んで精神生活としては恰も親を便る子の如くに世界を絶對的に依賴するのみては、竟に不安と不滿のみに終る、何にとなれば世界は則生老病死免れ難く、無常苦空は遁るゝに由なく、然して精神は永遠の生命常住の平和を求む、精神の欲望此に到り、最終の目的甚だ大になるに及んで、初めて心靈が世界依賴の眞理ならざるを自覺し、絶對の親に依賴をすべきを識る靈性は絶對の親より世界なる親に預けられたるものとして然らん、而して精神向上して或程度に到れば、世界依賴心を脱し大なる親に依屬するの眞理なるを悟らむ、抑是れ宗教が世界依賴心を脱して絶對に依賴すべきを敎ゆる所以なり、然らば如來は如何にして吾人を攝取して本居の都に還る道を示す、是れこの章を說明する所以なり

性起とは性は如來の自性にて世界性衆生性とは異るも、世界は如來の絶對の反待なる相待、涅槃に反する生死と云ふ如く、すべて反待に向ふて在る、其衆生を本の絶待の方に向はせ本覺に歸らしむる爲に、自性より發する理性と勢力とを以て、衆生を攝取す、精神の方向を一轉せしむるか宗敎の一大關捩なり

性起の說に就ては華嚴の性起正法品に、自性より佗性に迷ひる衆生を醐迷せんが爲に如來は自性より此世に出興せしなり、是に就ては重大なる因緣を以て事が此に到りしなり、更に云はゝ自性の本家を迷ひ出て六道の佗鄕に惑へる子らを本居の父の許に還らしめしむる爲に出し身を性起と云ふ

如來が自性より常恒に十方法界に發布しつゝある大勢力を、法身般若解脱の三德とす

此理法此勢力が、換て云はゝ神か人の信仰に及ぼすロゴスなり法身とは一大法身が萬有の原則としそが動く處作す處、條理あり秩序あり一方には自然界に行はれて自然律となり世界の相待規定とし因緣因果の法として行はる是れ世に謂ゆる自然の造物主なり三展したる衆生は因緣に規定せられ實に複雜なる關係に依りて生物が個々特殊性をなす萬物は悉く因緣に規定せられざる物なし、換て云ば自然の則に約束せられて成立して居る、故に攝取の時には之を解かざるべからず

攝取の法としては先の自大向下とは反對に向上の法にて、衆生が因緣に縛られ、業に繫がれ、世界に約束されて居るを解て解脱自由の心となすが目的なり、人爲の法律に民法商法などにて約束を結ぶ如く、自然界に天に自然の規定あり、世界萬物は皆因果律に約束せられて居る、例せば地球は何故に轉輪するや、太陽との約束あればなり、衆生の中に人類の個體性の如く人々各特殊の性質あり或は吝嗇なるあり、懶惰なるあり、夫らは遺傳に約束せられ習慣に約束せられて何れの方にも成り得らる理あり縛ふも解も皆法なり、是れ法身の理の萬物にある所以なり

如來が一たび世界と衆生との因緣に規定せられて生死に縛られあるを解きて、自性の源に還らしむるには矢張、解く法に依らざればならず本大法身より出でゝ切て切れぬ性が有る故に、法に稱うようにすれば本の父の許に還れる筈なれ共、其理法が分からぬ是に於て般若と云智慧なくてはならぬ是如來が智慧の光を與へ玉ふ所以なり、智慧にて理が分れば又小なる我は實は世界の因緣に規定せられたる個體自治體を我と成し我に種々遺傳に自己の習慣に動物の祖先よりの種々の垢質が持て居る之を脱せざればならぬと自覺し又進みては世界に依屬する心も脱却せざるべからず己の動物性に縛られ習慣に結はれ自然の老病死等の掟に結ばれて居る精神は眞の安心はならずすべて結ばれたる物は解かざるべからずと意識し悉く解脱して竟に絶對に達すれば約束より成立したる法にあらざる故に本然の自性大解脱大自在なり、大なる父は子を世界に預け衆生に預けて約束の下に或る程度にて育てさせ時到れば其約束を解きて如來自己の中に攝し玉ふなり

上來は如來が衆生に對する攝取の理法を抽象的に說明せし更に重ねて具體的に論せん

頌に云く、如來は自性終局の、心靈界に攝せんと、報應二身を示しては、歸趣の理性を顯はせり、遠求二心は神人の、因緣力の理法にて、光明攝化の終りには、本始不二とは成ぬべし

すべて高等なる宗教の神人の關係を具體的に表せは、一切衆生は本の父に背き常住の樂園を離れて、自から生死の街に迷ひ罪を襲ひ、惡を重ね、永く闇黑の獄火に燒かるべきを、父は子を憐れむの慈悲より身を分けて人の世に出て、迷子を本國に還るべき道を示す

釋迦出世の一大事此に存す、三世諸佛の出世と云も歸する處こゝに在り、キリスト神の子として衆生に代りて十字架上に罪を贖なひしも又然り論註に如來に二種の法身あり、法性法身と方便法身となり、法性法身より方便法身を出し、方便法身に依て法性法身を顯はす、法性身とは光明名號經に謂ゆる本有法身常住無量壽佛、無始無終の本地身、その法身を背にして生死の世界に迷ふものゝ爲に、方便身なる法藏比丘の身を示し無量の大願を發し、十劫正覺の果成を現し、衆生を攝して本有の淨土に還らしむ父の許に還て見れば十劫の彌陀は實には本有常住の佛にて在りしと

如來は自性の方面に衆生を攝取せん爲に報應二身を現すと

先に已に三身の說を略明したりしが重ねて論せん、阿彌陀佛は十方一切法報應の本地にて三身を統一する本佛なり、三身を區別して各其方面及び掌さどる處を明さば、法身は天則秩序の原則にして自然界に對する萬法の統一的存在なる身なり、法身佛が天則を以て天地萬物を攝理し玉ふ秩序の整然たるを見よ天何と言ぞや四時行はれ萬物成る、天體の無邊なる何の所にか法則の存せざる處かあらん、物には則あり理あり火に水に電氣に物理の原則皆法身ならざるなし、眼は何故に視ゆる哉法爾なりと云のみならむ火は何故に熱きや同じく天則と云ばかりならむ、一大なる法身佛展して世界の天體となり太陽と成り地球と成り人と成り、無量塵數に分身すれ共、本の一體を割べからず、不可割の一體が無量に分身し、吾人本法身の分子相待の因果律に約束せられたるも一大法身より稟たる小法身なり向上の或程度に於ては大々的に精神的に發展し、大なる父に遇ふと得ざらむ

如來は天則秩序の原則たる法身佛本體のみならず、衆生を終局目的に歸趣せんが爲に報身佛を現し玉へり、報身佛は或一面より觀れば宇宙全體に徧照せる大智慧光明なり絕對無限の大圓鏡智なり、宇宙全體が智慧の鏡なるが故に、諸の大菩薩の淨心を以て之に向ふ時は如來不可思議の用として、八萬の相好光明遍ねく十方界を照し金銀ルリ寶石等の自然の萬寶を以て莊嚴せる微妙なる淨土に在し、其れに應せる諸の大菩薩の爲に常に說法し玉ふ、大智慧の鏡が法界に周徧するが故に妙色莊嚴の佛身佛土も法界に周徧す、但し衆生業障深重にして觀ると能はざるのみ、法體と大智慧と無始無終の故に所現の靈界妙色莊嚴永劫に滅せず壞せず、密教に謂ふ報身は大日如來の萬德豐備を現はす爲の示現にて、報身に自受用法樂と佗受用法樂との二用あり、自受用法樂としては大日如來徧法界に充滿せる神秘的の靈妙不可思議なる自の境界に自ら自然の大法樂を受け玉ふ、佗受用法樂とは諸の大菩薩衆の爲に如來無量の相好妙色莊嚴微妙の音聲種々の妙香美味靈觸を以て法界に充滿し如來と融合し三昧神通不可思議の靈象を以て常恒に大法樂を感せしむ之を佗受用法樂と云

報身佛は本有常住無量光佛の一大靈力より常恒に衆生を攝化せん爲の現身にして心靈界の太陽なり、譬へば太陽が光熱化の三線を以て、物質界の明となり溫煖となり萬物を變せしむる如く、報身佛は人の精神に對し智慧と慈悲と靈化の力を以て衆生に開悟と與樂と進善との德を與へ玉ふ報身は密教の加持身にして信念の衆生と三業冥合し衆生心をして覺に佛に同化し玉ふ身なり、尙注意すべきことは宗教に時間的宗教と空間的宗教とあり時間的のは因果的關係にて因に菩薩の修行萬善功成れば因の業に報ひて果に萬德圓滿の佛身佛土を感ずるを報身と云、空間的とは主體と客體の因緣人の信仰に報ひて客體として現ず。信仰なければ報の現るゝなし信念彌進む時はそれに酬へて報身相好莊嚴依報の莊嚴も亦益廣大なり、菩薩の信念の極に至れば客體も亦法界周徧能所一體となり、彼此の相なきに至れば菩薩即ち佛と成る

報身佛は、萬德豐備の相好妙色身とし智慧と慈悲との光明を以て、衆生を撰擇攝取して解脫し同化して永遠に救靈し玉ふ佛身なり

應身、報身佛の應化分身なり、報身は最高等の淨界に在まし、衆生に攝化の光明永

しへに照せとも、迷界の衆生は無明に翳せられて、之を知らず焉に於て報土の慈父、殊に迷沒の無明を憐れみ、身を分けて人類に應同せる人佛釋迦を現し、娑婆に在て、衆生を導き、教ゆるに報身如來に歸命信頼すべきを以てす報身佛は最高等なる淸淨界に在て釋迦の教に隨て、歸命信念の衆生を攝取し玉ふ、此を導師は釋迦は此方より發遣し彌陀は彼方より來迎す、此に遺る彼に喚ふ豈に去らざるべけんやと

攝取門の內前の抽象的の理論として法性に順し眞理を悟り解脫を得る道を教ゆるが聖道門にて具體的に親子の因緣を以て慈父が子の爲めに慇をたれて救ひの道を與へ玉ふと敎るが淨土門なり、宗祖の談義に往生淨土の頓入は、眞如法性を以て、法藏の行因に究めしめ佛智の所照に讓らしむ是を佗力の體とす

被攝の衆生は自己は如來を離れて別に我も我力も有こと無し然を其眞理を自覺せざりし爲に父に背き罪に陷ひりしも今は父の心光に照され父と共なるを信じ、又世界賴屬の心を脫し絕對なる如來の中に安立を獲れば身は世界に在りながら、神は淨土に逍遙す、報命盡る時は全く報土の涅槃界に歸す無對光の下に詳くせん

無邊光　相大處として照らさゞる無し

如來の本體は絕對大靈態なりとすれば其相と用との二屬性なかるべからず相大とは心靈の象相にして即ち大智慧態なり用大とは能力無碍光の下に明す、人の心理に觀念、理性、認識、感覺との分類に例し、如來に大圓鏡と平等性と妙觀察と成所作との四智とす

初に大圓鏡智　頌に、絕對觀より相待の、物心二象は阿賴耶にて、十方三世色心は、大圓鏡智の影像なれや

一大心の觀念態を說明せんに三とし初に絕對觀念、次に主觀客觀、三大圓鏡智、初に宇宙は元來絕對的觀念態と云はざるべからず吾人が主觀の心相と客觀の物象とは全く反待なる如くなるも其本質は同一なるべし何となれば若し本質にして別々に氷炭相容れざる如くならば吾人は如何にして客觀を寫象することを得ん吾人の認識する主觀の物質と客觀の心象とが同一本質の相待的現象なりと云べし又吾人の主觀か客觀を通して直觀し得らるゝについても本質同一なる證明ならずや、主觀と客觀とは本來一體な

り但し衆生が今此世界の相待規定の見地より內觀を主觀と曰ひ外觀を客觀と見るも絕對自體より見れば一大觀念態なりと云べし、此觀念態が相待的に互に反待の現象の故に物象と心象と明瞭に現したるなり若本質全く異ならば寫象すること能はず、亦現象に於て反待ならざれば現相象と現ることなからん、同一本質を反待に現象したるが即ち吾人認識の物心二象なり、故に絕對觀念が吾人の主觀と客觀との本源同質なり、相待現象と認識するは衆生の阿賴耶識なり、尙ほ進んで宇宙一大觀念の光明大圓鏡智を以て照す時は十方三世一切の依正色心等橫に十方を盡し竪三際に徹して遺すことなし故に宇宙全體が大圓鏡なり十方三世を同時に照すは報身如來の智なり、吾人の世界に規定せられたる心は物心二象を各別に認識するも、若し吾人冥想に入り直觀し大圓鏡智と相應する時は吾人の觀念は十方を盡して遐りなく三世に徹して底なく、十方三世一切の色心は自已一大觀念鏡の影像たるを悟らむ、卽ち空間に時間に無礙觀なり、若し之を明かに發見したる時は付て廣大なりと認たる太陽系及び天體の星宿も悉く一大觀念中の塵々なるを識らむ爰に於て觀念的に世界を脫して絕對に一致したるものとす

平等性智

頌に、一大理系に枝條を爲し、大小差別に分れたる、自治統制を自我と爲も、平等性智に統らるれ

一大心靈には自性に統一し攝理する靈智を有す、そが相待の世界にも亦衆生性にも其本一大より展したる個々なれば大理性の性を有す

宇宙には物質界精神界を統一する存在が即ち如來にて其攝理性が是智なり一大理系の相待世界には天則秩序の理性として萬物を統制す自大向小の衆生中最微少なる單細胞の生物にも自己を統制の性あり人の身體の一分たる一毫も又數多の分子を聚めて統制自治體を爲し其統制は小は大に統らる、四支五官等は一の身體に統制せられ一の身體中にも無數の統制自治體は行はれ有べし個身を聚めたる團體を一家として統制し一國として統制自治體を爲し進んでは太陽系は數多の星宿を統一して自治體を爲し展大して宇宙全一の統一自治を佛法身如來とす、世界も一大理性の相待性の故に因緣因果の律を以て統制を爲す

萬物は自治自制自發自造の性を有す、一統制自治體を爲す物は即ち一の自我なり、自我は己が分を守り自己と佗との混濫をさくる性能なり、又各自我には大理性の統一關係を有する故に萬有に貫く理性の存在を認むべし、自己の理性と佗人の理性と本一體の個々現なるが故に、人の精神の理性も萬物普遍の理性が心理作用として現じたる者と云べし、理性は能く自然の理法を判斷し推察し得る心の働きなり、人に理性備はらざれば秩序を整束する能はず自然萬物の若しは植物の生理又は天體の運行如何なる物にも秩序あり條理あるを見れば萬物内存の理性を否定すべからず、宗教的人類として吾人は生理的の統制自治體を造り居る個體の故に精神の理性を以て我と彼との權利及び義務を混せざる爲の自覺の我なれば、相待的に我を認むべきは必要なり、然れども肉我慾の我は罪惡の主體なり

平等性智は一大心靈の自性にして自然に照す智慧なり、諸佛最上覺を成する時の一切智無師自然智とは此本然の智と合するなり、前の大圓鏡智は心の相にて平等性智は心の性なり、禪家の見性成佛は自己の心源自性開顯を宗とす故に性智と相應す台の空假中の三性は前の大圓鏡の觀念的と相應す、故に禪の悟道は觀念を排し直覺的に自性發見す自性開顯すれは宇宙の眞體に徹通す即ち是平等性智なり、然るに自然と因緣に規定せられたる我は生理に縛られ因緣に結ばれ自ら自在を得す此の天性の我を脱し理性的自覺の我は人間としては權利義務を自覺し自己の天職を自覺したるも自然律に約束せられて絶對的の自由を得す、若し自性の根底なる如來性智と合一する時は自性我にて大自在なり即ち是れ大我なり大自覺なり、平等性智は宇宙本然の自性の光にして十方三世一切の世界及衆生等は悉く此大性智に統攝せられざるなく又之を自性の根底とせざるなし

妙觀察智

頌に、體生相即相入の、識智は一即一切の、重重無盡の交渉に、生佛冥合は妙智なり

宇宙に神明不測と曰ひ造化の妙用と云ひ三密冥合神人合一等の宗教的關係の神秘的不可思議の妙用の行はるゝは妙觀察智の妙用存すればなり、斯妙知は自然界に在りては

陰陽二氣の合する處に造化の妙用あり、靈界には神人合一三密融合する處に衆生の知見を開き佛子を生する作用あり、宇宙の甚深秘密藏を開きて精神的無價の珍寶を與へらるゝは妙智の用なり

前の二智は衆生の方より云はゝ自己の最根底を開顯して絶對と合一する處にあり、妙智は自然界に云はゝ陰と陽との合する處、靈界にては人と神との合する處に感應より起る妙用なり、是より斯形而上を論せば

一大心體は一大觀念と一大性智とを統たる絶對にて全一不可割の故に其中に所有る十方三世一切色心依正事理淨穢生佛皆相即不可離の連絡を爲す空間にも時間にも一塵たに即せざる無し故に一を舉ぐれば全體を相收す、一切の物が用の方よりは互に相入して拒まざる性力を有す、故に體としても用としても一即一切一切即心一切の關係を可能にす、若し相即の方より試み玉へ直觀的に宇宙一體に入て見れは十方洞然として空間も時間も一體絶對性となるべし然る時は宇宙の萬物一として自の大觀念中ならざる物やある萬物相即の理は自ら識るべし十方國土及一切諸佛も一大觀念中に相即して不可割なり、又用の爲に相互に交渉する作用なり、試みに淸宵仰きて九苔に眼を注ぎ視よ數へ盡せぬ星宿は瞳中に相入して遺さす又一か一切に入る一輪の月か世界中の眺むる人の眼中に相入し又草の葉末の露にも池にも水の在る處に月の入らざるなし此地球に覆ふ空氣の分子は無量無數ならん太陽は一々の分子の中に悉く相入して居る、一か一に入るとは人と人と相愛しあふ間には互の心の中に相入合ふ如く、又博學の知識は世界の有ゆる學者の研究より材料を聚めて入れて居る、一人の發明が世界中の人に使用されて居る、一即一切一切即一切宇宙間の有ゆる分子の中に一々に所有る分子が相入す空中に一の寶珠を繫け置かは天の無數の星が悉く其珠中に映現す、寶珠のみならす微塵にても理は異ならす、重々無盡の交渉は自然に行はれあり、相即相入は電に凭慶の關係が能うと云許りに非す、其因緣に依て人の印象も感覺認識觀察判斷記憶發明等の作用を爲す、相即相入か人を造る家庭も教育も四圍の感化も妙智の用が衆生性により衆生行はれ有るなり斯因緣が陰陽の二氣の交感と成り雌雄兩性の關係と成りて造化の用を爲す、太陽と地球との間にも太陽の愛は地球に加はり地球は太陽の能力を持

て造化の用を爲す、陽の和氣に感して櫻花は開く其花の匂ふ中にも雌雄の交感は行はれて造化の摸倣をなす天地陰陽二氣の相入に依て地上に造化の作用が行はれあり

陰あり陽あり相入の妙用あり人に理性あり感性あり能動所動若し兩者同ならば相入の妙なからん認識の原因に就て獨の理性派と英の感覺派の如くに一方のみ偏して認識を論するは相即相入の眞理に達せざるなり

妙智の用不可思議なり心靈界の生佛感應神人融合の方面より說かんか、入深禪定見十方佛、冥想三摩の窗には十方法界は無窮無涯なれ共行者の心中に現前し我往がず彼來らず是れ妙智の用也、淨界の如來は穢土の凡夫心中に相即相入し啓示し融合す、二千數百年の釋迦文佛諸の大衆と俱に今我心に現前して微妙の法を說き云ふ、十萬億土遙かなりと雖とも今我腦の無窮なる中に存在して遠からず、盡十方無量の佛及び世界は今我腦の一感質に相入す啻に相入のみならんや佛の聖靈我に感じ我を同化し玉ふ、如來の默示を感し絕對と融合するは、一切の佛法を啓示悟入せしむ斯妙智の用なり、一切萬物の中に諸佛は常に光明を放ちて說法す、宇宙は實に蓮花藏界なり妙智の鑰を借て開かれよ、寂光淨土は今斯にあり斯智を以て知見すべし相即の故に如來と共に我は在り相入の故に如來我に入り我また如來に入る如來我に融合して受用法案を受けしむ自然界心靈界に通して我と彼れと物と我と神と人と全體と一箇の間に相即相入したる處に感應し認識し悟達し發明す檜子の落るを見て地球の引力を悟りしも物と人の因緣に依りて得たるなり、皆すべて天才の頭腦中に發明することあるは斯智の人心現なり彌陀身心遍法界映現衆生身想中、何れの處に於てか感應せざらん發悟せざらん、斯神秘の妙用は宇宙全と一塵と相入乃至一切塵々の中にも常恒に交涉し不可思議の妙用行はれつゝあり、ア、妙又妙ならずや

成所作智

頌に、五識五塵は業感の、所感は種々に異なれど、佛慧靈妙の感覺は、智所共に

作智の用

宇宙は絕對觀念態にて开が相待界には主觀客觀の二象と現したり、其の分子的作用とも云べき、性能が主觀と客觀との間に現はれ主觀には衆生の五識即ち眼耳鼻舌身の識

とし、客觀には色聲香味觸の境と現はれり、此兩者の關係に視聽嗅味觸との感覺作用は起る感覺は業識の種々なるに依て必ずしも同じからずとは唯識の說なり阿賴耶識が業に隨て種々に異りて感覺す一水四見の例を擧て示せり一つ水を人は水と見魚類には人が空氣を見るように感じ餓鬼には熱水と觀し天人には淨き瑠璃と見ゆると、又例を云はゝ同室に在りても知識高き人と猫とにては書畵の美術に對しても衣服に對しても人間が見て味ふのと猫の感覺には同感とは想はれず蠅は蠅丈けに感覺し犬は犬たけに感じ人類にして始めて人間的に萬事が感し又味はるべし若し人類の肉の五官にては縱令十萬億土を超るとも矢張り人間世界の外に感しよう無からむ、現在吾人が肉の五官にて經驗する方を自然界と云佛は五眼具足せりと肉眼は器械的に働きて自然界を見つ天眼は神通感應して千里眼又透視眼の働らきを爲すと、法と慧と佛との三眼は心靈界の方面を見る若し慧眼を開きて宇宙を觀すれば直觀的に肉眼に視ゆる萬物は跡も無く唯洞然として空積極に云はゝ大觀念の精神態のみを觀ず、若し法眼を以て視れは前の慧眼の對象なる大空中に微妙なる衆寶莊嚴の淨土實に奇麗にして不可思議なるを觀ん淨土敎に明す處の淸淨國土廿九種の莊嚴等は皆法眼の對象なり、韋提夫人は法眼開きて淨土の莊嚴を觀したり、諸の菩薩が法眼淸淨の故に常に淨土の莊嚴を感覺す、若し佛眼を以て見れは法慧兩眼を合したる故に重々無盡の蓮花藏界十方一切の佛土所有る莊嚴を究めて一塵に入りて現す等一毛端に無量諸佛在して說法するを見る、又佛眼を見れは宇宙間一切處一切萬物中に常恒に妙不可思議の佛事現前す等擧て言べからず、絕對心靈としての宇宙に衆生は肉眼を以て自然界の五塵を感覺し聖者は心靈界に淸淨佛土妙色莊嚴を觀す、極樂是涅槃界便ち佛と人との所感なり、記主曰く若し佛及び證者に約して云はゝ極樂は無邊際なり又極樂は涅槃界の故に方所なし、導師の涅槃の莊嚴處々に充てり等能く考ふべし

無礙光　用大　處として解脫融化せざるなし

如來一大靈力不可思議の業用か一切の時一切の處に存在して萬物に對し一方には普徧の理性として命令的に秩序的に行はしめ、又一面には恩惠を以て萬物を撫育養成する勢能となり、自然界と心靈に及ぼし自然界には天則秩序の理性とし又天の恩惠として

衆生に對し心靈界には攝取の勢力とし神聖に道德秩序の光とし正義の道を明し就ては眞を見る眼なく正しきに行く足なくて聖意にかなう道を行くことが能はすこゝに靈を養ふ力なる恩寵を以て衆生に對す其妙用か法界に充滿す故に處として解脱融化せざる無しと

頌に、一切智能は天則の、神聖正義恩寵の　大道自然に行はれ、天命天惠とは爲りぬ

法身は萬有を遍動せしむるに盲動的に非ずして秩序あり條理あり此か一切智知の作用なり、自然界には天命的に行はるゝ道ありて萬物の則となる斯道即ち天道なり亦宇宙の大道なり父か子に行なはしむ道なり、謂ゆる天命的に行ふべき大道の光明なり、法身が如何なる性能を以て親か子に對する聖意を示し玉ふ哉、即ち神聖と正義と恩寵なり、神聖とは言を借て云はゞ天に在ます父が吾人の行爲を照鑑する智慧なりそは眞理の性にて無上の權威を以て吾人に嚴臨し云ふものと信じらる孔子か天道を畏るべし富貴天に有り死生命あり又苟くも罪を天に獲る時は禱る所なし天何と言云そや四時行はれ萬物成る等實に天は公明正大にして私照なし何人か其命に隨がはすして可ならんや天地に行はるゝ自然の秩序を見法則の存在を認むれば天命は神聖にして侵すべからず正義にして私なきは天の道なりと信じらる、天の恩惠は廣大なる設備を以て衆生を活す至れり盡せり餘りに大なる恩惠は人の意識幼稚にして感ぜざる如し夜行に提觸の恩は感ずれ共太陽の德は覺へず天の恩寵深く想ふべし、吾人が天地と仰ぐ自然界も絶對なる法身の一分なれば凭く衆生を天命とし天惠とし此天地の間に長たる人類として吾人を生活せしむる目的は絶對なる涅槃界に攝取せん爲なり

頌に、歸趣には無礙の大道が、衆生攝取の聖意なる　本願不思議の力にて　靈我自由と爲し玉ふ

天地の間に天命となり天の恩惠とし萬物を養ひ人類を向上せしむるも其源は絶對唯一の法身の理性と勢力とより世界に現はれし衆生を子として養ふものなれば衆生の理性と尙進んで靈性がほのめくに至れば、絶對の自性より常恒に發動しある終局目的の大靈力に歸命信賴するの眞理なるを自覺せん、攝取の本願力とは謂ゆる終局目的を具體的に表したる語にて言換れば神より人類を吸收するロゴスなり如何にして如來は衆生

を靈界に攝取し玉ふや其は前の法身槃若解脱の三德を本願力と云ふ尙ほ本願力は人の精神に對する勢力なれば物質に例せば太陽の光熱化の三線を以つて自然界の萬物に對する如く今の如來は人の心に對し智慧と慈悲と靈化との力を以て智見を啓き解脱靈化の用を施し玉ふ、知見は如來の神聖の光を見る實行の眼にて知見開きて佛の正道を行ふべく又衆生の聖意に稱はざるすべての惡素質を脱却して人格を革新し靈格とし道德的自由の身とし玉ふ

如來の三德

如來の終局目的は衆生をして、絶對の聖意に攝して父子相和して永遠の安寧を得せしむと俱に、聖意の子たる本分を遂しむるにあり、換て云は父の全き如くに全き靈格として現存を通じて永遠に佛心佛行せしむるにあり聖意に依りて心の捨べきを棄て脱すべきを脱し聖靈格とするにあり就ては非靈態を去り聖態養ふ如來は父母なり、喩は人の子も父母に依らざれば生成し能はざる如く、如來の父母に依らざれば聖靈は生成し難し父母としての如來は、吾人の信仰に對して、三德を以て子の靈性を養ふ、三德とは、神聖、正義、恩寵、是なり、神聖とは

頌に、神聖無上の命令は、道德律の甚ひなり

子を敎養する畏敬すべき師父を要す如く、吾人の宗敎心には宇宙に絶對的に尊敬すべき神聖にして侵すべからざる、靈體の實在を信ず　獨一に敬すべき如來は無上の威神の光明あり最尊第一にし、尊中の尊たり衆生に嚴臨するに一方に神聖態なり神聖とは衆生の爲に善惡邪正を照す智慧なり、如來は眞理の源にして眞理の光たる智慧は神聖なり、神聖なる知鏡の前には何人も畏ふべからず、眞理は普徧的にして私なし、故に何人をも制裁するの權あり、如來の神聖なる智慧には無上の權威あり、故に斯神聖の光明か宇宙に存在して自然界には天則の秩序と成り、衆生の精神に對しては道德律となる、天體の星宿か自己の軌道を逸せず故に永遠に變せず人は如來の實行的智慧なる神聖の命令的勢力を以て吾人に對し玉ふと信ず、換て云はゝ如來は明かに我か意を照鑑し玉ふ智を以て我に斯くせよと命令せらるゝ觀あり、如來の神聖は宇宙大心靈の良心なり、吾人の良心は如來の神聖の命令に從ふべく賦せられたり

吾人の良心に赫々と光を放ち玉ふ神聖なる如來は吾人をして至善に導く指導者なりまた吾人を永遠の安きに保護する守本尊なり

如來の神聖は至善の大道を照す光明なり、闇夜に航路を照す燈明臺なり、神聖か概して宗教の戒律となりて道德を律す、戒律に作持と制止との二義あり、一は正善を作すべきを律し佗は邪惡を制止すべきを律す、又自律と佗律とあり佗律とは自己の非惡を制裁して正善に進むべきも意志の力弱くして自由を得ぬ者には他動的に道德の律を爲す、自律とは如來の神聖なる光明の照臨に自己の非惡を制止して聖意の正善に向ふて道德的行爲をなすを云ふ、換て云はゞ神聖なる神の聲が自己の良心に囁きて制止作善すを自律と云ふ

正　義　頌に、正義は撰善捨惡にて　至善に向て進ましむ

神聖は道德律を照す光にて正義は至善に行く道なり、人の方より云はゞ道を見るの眼と正道に行く足なり、又神聖は實行の智慧、正義は實行の足なり、彌陀の本願に知願とは即ち神聖にて擇善捨惡の本願は正義なり、撰擇の理法に依らざれば眞善微妙の淨土實現し難し

斯の如く捨惡擇善の本願より成りし精美眞善の精中の精靈中の靈なる淨土に入らんには如來は如何なる規律を以て吾人を淨界に攝取すべきそ曰く如來は撰擇本願を以て衆生を攝取す知らずや攝取の本願力は常恒不斷に衆生の心意を默檢して撰擇し玉ふ、然らは合格と不合格とは何を以て標準とす一切の非惡の根本は主我なり自力なり我の非惡なると信認し自力を擲ち純ら如來を信せよ他力とは一切正善眞美を攝したるの義なり主我主義と自力は撰捨し純粹に如來に歸すれば自然に同化せらる故に己を献げて如來に歸命するか是れ正義なり是彌陀の本願に撰擇せられたる人なり、又如來本願力とは絶對の終局目的の勢力なり、絶對の目的に參加せるには我の個人目的を犧牲にせざるべからず、個人目的を捨て絶對目的に歸せば必ず大海に流入す

恩　寵　頌に、恩寵は三緣の惠にて、靈を育みて聖子とはす

譬ば子を養ふに師父の指導を受け父の業を學ぶに先たちて母の慈愛の懷に在て哺乳の養より家庭の教育を受くる如く、如來が衆生の靈を養ふ母としての力を恩寵と云

信念のある處に恩寵は被むる小兒生れて初めは母の恩容を見ること能はざるも哺乳の養に依て漸く兒體と共に五官の機能も發達して母の溫容を見ゆる如く如來の恩寵に依て靈性稍增進し知見を啓示せらるれば如來の慈顏を感見し相好光明に接觸し感情には苦惱を解脫し恩寵に融合し靈妙なる喜樂を感ず等禪悅法喜の妙味を享受し尙進みては意志を靈化し心開く時は如來の神聖光の中に正義の義務を感じ聖子たるの本分を盡す即ち願作佛心そは如來の恩寵に由て益發達し願度生心としては有緣の人に頒つに和顏愛語同事利行等の事を以てす、恩寵に三緣あり無緣の慈と法緣慈と衆生緣慈となり報身如來は靈界の太陽として大悲の光明常に十方法界を照らして無緣は緣せざるなし故に絶對なり

無緣の慈は遍ねく照せども此人界の衆生には知見すること能はず焉に於て如來應身を以て世に出で普ねく道教を演べて如來の慈悲に接せしむ佛法を開きて徧ねく人類に及ぼす是法緣の慈とす、又世に流布する佛法を師友善知識若くは家庭の教養に依りて素養を受けて導かるゝ衆生緣なり、報佛の恩寵が自然に法身に遍す此を人類に宗教となりて、行はるゝは法緣にて師友及び家庭の教養は衆生緣とす本同一恩寵の應分現なり

大正十二年八月十五日印刷同二十日發行
誌代年六冊登圓貳拾錢　年十二冊貳圓
編輯兼發行人　山崎辨成
印刷人　秋場熊太郎
東京京橋區本八丁堀一丁目十五番地
東京小石川區水道端二丁目四十四番地
發行所　ミオヤのひかり社
振替東京四九三四八番